

ライマン雑記(23)

副見恭子¹⁾

1. 最終章のはじめに

筆者が住んでいたマサチューセッツ州西部にまぼろしの日本図書が埋もれていると聞いたのは、司書としてマサチューセッツ大学に移ってきてから、3年目の1975年であったと思う。大学図書館の和書をもっと増やさなければと計画していたので、是非まぼろしの正体を見極めてみたいと思った。このまぼろしの書が、1979年10月1日、時々訪れるノースハンプトンにあるフォーブス図書館の地下室に眠っていることがわかったが、古書、珍書であるとは、全く想像さえしなかった。

和綴じ本と対面した瞬間の驚嘆を鮮明に記憶している。「伊勢物語」「古事記伝」「万葉集略解」「和漢三才図絵」「地錦抄」等がずらりと並んでいるのを見た瞬間、幻ではないかと目を疑った(第1図)。その日、コレクションの寄贈者であるベンジャミン スミス ライマンの名を心に銘記したのである。

ライマンについて、全く知らなかったのが、第一歩として彼の生い立ちから調べ始めた。やがて調査が途方もない仕事であることが、徐々に明らかになっ

た。ライマン文書はフィラデルフィアにある米国哲学協会とペンシルベニア歴史協会を中心に数箇所があり、伯父J. P. レスリー、大学時代からの親友フランク B. サンボン、またずっと後に知ったライマンの友アルバート J. エドマンズ等の書簡や日記等を加えれば、数限りない。当初、私にとって一生をかけての仕事となるのではと、しばし、ためらった。

アメリカおよび日本の事典、人名録などで“ベンジャミン スミス ライマン”を調べると、出生は1835年(天保6年)12月11日米国マサチューセッツ州 ノースハンプトンと一致するが、1920年(大正9年)8月30日死去した場所が、フィラデルフィア市とフィラデルフィア近郊に分かれ、前者の数が圧倒的に多く、後者は数少なく、日本出版物によることに気づいた。しかしどちらが正しいか、いずれ調べなければと、心に留めたに過ぎなかった。次から次へと「ライマン雑記」資料集めに追われ、はるか先の最終章のことまで、思いめぐらす余裕はなかったが、完全に納得がいくまでは、執筆を終えることは決してすまいと心に誓った。

1982年だったと思う。Historic Northampton 図書室で、ライマン資料に目を通して、ライマン先生=134エルムストリート煉瓦の家、現在スミス大学パークハウスを建てた居住者=伝記入荷の見出しの切り抜きが目にとまった。1937年出版された桑田権平著「ライマン先生小伝」の英語版「Biography of Benjamin Smith Lyman」の紹介で、評者クリフォード H. ライマンが、最初に著者桑田について簡単に述べて、書評を加えた記事である。彼はライマン血族の一人であろう。当時、ライマンの血縁がノースハンプトンに多く住んでいた。彼が書いた紹介の終わり近くに、“Lyman died in Challengham PA in August, 1920”と書かれている。大発見に喜んだのも束の間、Challenghamの地名は、アメリカの何処にも見当たらなかった。



第1図 ライマンコレクションの一部(里見八犬伝等)。

1) 元マサチューセッツ大学東洋コレクション司書

キーワード: ライマン, エドマンズ, 菜食論

暇になったらもっと調べてみようと言いに聞かせ、再び解決を棚上げにすることにした。

1996年7月、長年の希望がかないフィラデルフィアにある米国哲学協会図書館とペンシルベニア歴史協会を中心に、ライマン文書調査を行った。哲学協会のライマン文書は約18,000点と言われる。コロンビア大学で日本歴史博士課程を学んでいた我が友ローラ・ナイツェルと2人で、約1ヶ月間ランチタイムを除き、開館から閉館まで休みなしで、1枚1枚ライマン文書に目を通し、これと思うものをコピーした。ライマン文書の数は、ペンシルベニア歴史協会と比べると、米国哲学協会の方がはるかに多い。しかし、歴史協会の資料によって、アルバート J. エドマンズとライマンとの交際を知ることができたのは、思いがけない収穫であった。

1933年12月5日付のエドマンズが残した“Note on B.S. Lyman”のおかげで、ベンジャミン スミス ライマンが、フィラデルフィア郊外にある112 Elm Avenue Cheltenham, Montgomeryで死去したことが確定し、さらに数年後Googleによって、歴史協会に存在するアルバート J. エドマンズ文書の内容が発表されたため、「ライマン雑記」終了への道が開かれた。資料は53箱に収められ、長さ22フィートあるという。インターネットの発達で調査がずっと便利になったのはありがたい。フィラデルフィアに足を伸ばさずに、ライマンに関する彼の資料を得る方法はないかと考えた末、マサチューセッツ大学図書館のスペシャルコレクション主任ロバート コックスに相談した。その結果、米国哲学協会図書館の司書Manuscripts Processing Head, ヴァレリー アン ルーツに紹介され、エドマンズ文書調査が始まった。

自己紹介かたがた、彼女へ送った最初のメールに、ライマンが死去した家の住所を記したところ、すぐに返事があり、その家は夫妻が散歩の折、よく通る道にあると、家の写真が同封されていた。何という偶然であろうか。「ライマン雑記23」の構構が少しずつ展開し、最終舞台の準備完了、心が躍った。

2. 残照

次のドクター J.R. エギーへ書いたライマンの手紙によって、フィリピンで患った赤痢とマラリアからすっきり回復し、彼の古巣708ローカストに戻り、フィラデル

フィアの生活を楽しんでいる彼の姿が目に見え、日付けは1907年8月11日で、親しい医師エギーに、クリーニング屋を営む中国人の皮膚病の診断を頼む手紙である。

Sam Lee (three profits) 中国クリーニング屋のNg hung thoに頼まれて、手紙を書いています。彼が悩んでいるわずらわしい症状について、アドバイスをしてもらいたいと、明日12日月曜日、都合の良い時に往診してほしいそうです。彼の説明によると、あせも、たむし、皮疹の類の皮膚病かと思います。夜眠れない程、時々かゆみがひどいと言っています。私はよく沐浴しバセリンを用いるようにすすめていました。しかし彼はあなたの権威あるアドバイスを希望しています。料金は喜んで払うそうです。理解し合うのに、少しがまんが要りますが、彼は大変良い人です。残念ながら、私は明日ポツビルへ出かけなければならないので、診察に立ち会えません。彼は今週の他の日は忙しく、あなたを訪れることはできないのです。どうか都合をみて、往診して下さいようお願い致します。敬具。

ライマンは1907年2月頃から、フィリピンのセブで、マラリアと赤痢にかかり重態となった。4月末一緒に働いていた若い土木師ハリー F. カメロンに付き添われて香港まで行き、香港からヨーロッパ経由で帰国した。江戸で親友であった医師ブケマへの手紙で、薬を飲まず約6週間で回復したと、誇らしげに語っている。すっかり元気になったのは、ひとえに地質調査で鍛え上げた体力、日課の歩行、そして菜食のおかげだと彼は信じた。

ライマンは、常に弱者の味方で、困った人々へ助けの手を差し延べた。日本滞在中、馬丁、コック、下男、下女等の面倒をよくみた。例えば、1877年に日本油田地質調査で、長野県上田に宿泊していた時、コック Kō こと、幸太郎の養女の件で、上田から午前1時過ぎ早馬で出発、江戸へ駆けつけ、ひとまず事件を解決したことが、ライマンの野帖に記録されている。家来と呼ばれていた使用人達には、ライマンは慈父のような存在であった。20世紀前期のアメリカでは人種偏見、殊にユダヤ人、黒人、東洋人への嫌悪軽侮が激しく、ライマンのように人道主義的立場で行動する人々は少数であった時代である。

1912年子の年、ライマンは、開拓使時代親しんだ山



第2図 山内提雲書簡(ペンシルベニア歴史協会蔵)。

内提雲から便りを受け取った。日付は明治45年2月1日で、子年元旦試筆 七十五翁提雲とあり、ネズミの絵が描かれている(第2図)。

ミスター安達から、あなたの最近撮られた写真を受け取りました。大変嬉しく思います。壮健にして、柔和で高潔な容貌を拝し、最大の喜びです。私共の国へ来年か、再来年に来られるとのこと、私達の仲間をはじめ、あなたを知っている人達すべてが待ち望んでいます。私はずっと健康で、大磯に住んでいます。弟(山内徳三郎)は現在、名古屋で次男と住み元気です。どうか短い手紙をお許し下さい。外国人との交際が全くないので、今や英語をすっかり忘れつつあります。ご健康とご活躍を祈ります。

TM 山内

書簡の山内のペンマンシップも英文も未だ見事である。彼は16才の時、蘭学を学び、英語を物にして幕府に仕え、通弁としてフランスへ洋行した。元の幕臣、幕末のインテリで教養ある人々は、賢明で誠実、寛大で思慮深く、新しく権力を得た明治官僚と異なり、お雇い外人との交流を大いに円滑にした。これは、榎本武揚、大鳥圭介、荒井郁之助が、ライマンの忘れ得ない日本人、心から信頼できる友であった事実が、十分に説明するであろう。

1911年4月、佐川栄次郎がライマンと別れる際、再会を期待すると言った彼に、“疑わし”と答えたのは、1年程前から患っていた妹メリーの健康状態を考慮しての答えであったと思う。しかし彼女の回復を励まし

ていたライマンが、体の衰退を感じ始め、第一次世界大戦が起こった1914年には、日本再訪の望みも夢も消え果てた。

3. Albert J. Edmunds

アルバート J. エドマンズは、1904年にライマンに初めて会い、だんだんと親交が深まり、ライマンの最後を看取った「ライマン雑記」に欠くべからざる重要人物である。2007年にエドマンズ文書の存在を知るまでは、資料は極めて少なく、ライマンが彼に書いた1917年4月23日付の手紙と、彼の「菜食論」についての返事1通、それに、エドマンズの名が出てくる少数の手紙が手元にあるだけであった。

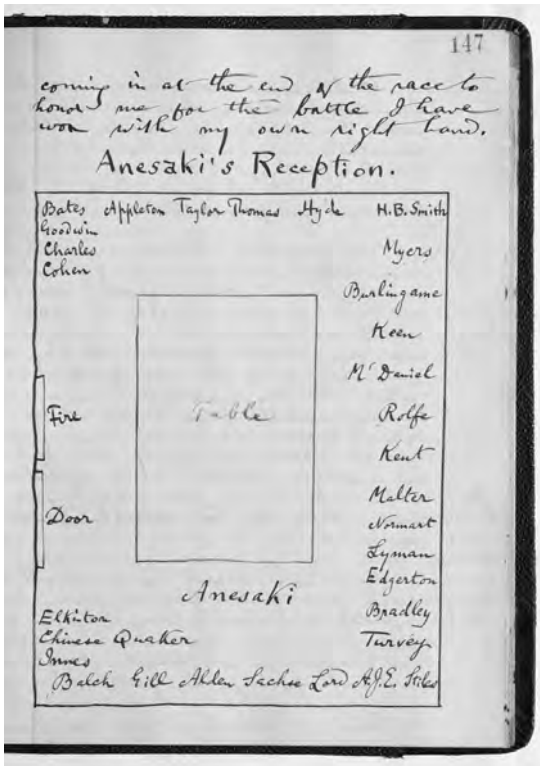
そこでまず、手始めにエドマンズの履歴から調べることにした。ライマンや彼の伯父ピーターレスリーと同じく、「米国人名事典」に掲載されていて、彼もまた、19世紀末から20世紀初期のアメリカ躍進時代に、主に仏教学に貢献した一人であったと言って良からう。

エドマンズは1857年11月21日英国で生まれた。ライマンより22才若い。1877年にロンドン大学を卒業。天文学者T. W. ブラクス秘書を3年勤め、1885年米国へ移住した。以後、司書として大学や公立図書館で働き、1891年から1936年まで、ペンシルベニア歴史協会のカタログ編集者として勤務した。

しかし司書の仕事は生活維持の手段に過ぎず、彼は、仏教学者、聖書研究者、神秘学者、オカリストとして、巾広く、奥深く研究し、語学、特にパーリ語(古代インド語)に秀でた。また彼は詩人であり、菜食主義者でもあった。彼の仏教に関する論文は、今日に於いても引用されている。2005年出版されたThomas A. Tweedの論文[American Occultism and Japanese Buddhism... Albert J. Edmunds, D.T. Suzuki, and Translocative History]が良い例であろう。

1911年、彼がライマンの近くに住むようになってから、隣同士の気安さで、彼らは次第に親密になっていった。兩人共独身で菜食主義者、博学のライマンとエンサイクロペディア的なエドマンズとの話は大いに弾んだに違いない。エドマンズは、アルフレッド大王の末裔であるライマン家の伝統とアメリカの自由と平等の精神とを併せ持つライマンに大いに魅せられたようである。

エドマンズのお化けの話はよく語られる。毎年10



第3図 姉崎歓迎会座席図(ペンシルベニア歴史協会蔵)。

月ハロウインの頃に、ペンシルベニア歴史協会に住み着いているお化け探しがあるらしい。特にエドマンズのお化けは有名で、3階の1室で、彼の声、足音、影、そしてカタログのラベルを作る機械が、独りで動いているのを見聞きした人々がいると言われる。是非、エドマンズのお化けにお目にかかりたいものである。

次のAnesaki歓迎会は、彼の一部を見事に表していると思う。日記約8ページにわたり1914年3月15日に行われたAnesaki歓迎会を、図まで入れて克明に記し(第3図)、彼は人生のハイライトと感極まった。彼の感激と喜びを語りたい。Anesakiとは、姉崎^{まさはる}正治のことで、近代日本文化の重鎮、鈴木大拙と同時代の仏教哲学者であった。彼は分野が広く、若い時代に高山樗牛と共に、明治文壇で活躍し、明治末期には、井上哲次郎らと、社会問題および宗教問題を研究するため、帰一協会を起こした人である。日本近代文化の貢献者として名高い。

Anesaki歓迎会はペンシルベニア大学ゲストハウスで行われた。参加した人々は、30名の東洋クラブ会

員と20名の同好者で、仏教家、ユダヤ人、カソリック、長老教会員、アルメニア人、クエーカー、回教徒、唯心論者、無神論者等、あらゆる宗教界の代表者が集まった。エドマンズが姉崎を先導し、また一人一人を紹介した。アメリカでこれだけの宗教家が集まったのは、まさに未曾有の出来事で、彼は日記に“我が生涯の最も誇り高き瞬間であった”と感動を以て書き留めている。その日の晩餐会が終わり、姉崎、エドマンズ、ライマン3人は揃って帰途についた。

やがてライマンと別れ、姉崎と2人になった時、エドマンズは彼にライマンについて、次のように語っている。“ライマンは無神論者であるが、神に召された聖者のような人です。”エドマンズの心底から出た信頼と尊敬の言葉が伝わってくる。

4. 菜食論

1914年4月8日付の手紙で、ライマンは親しかった助手賀田貞一へ、長らく無沙汰した理由の一つとして、彼の石炭鉱山経営の悪化を述べているが、まだ未練ありげで、希望を持ち続けていたように感じられる。しかし実際は借り手がなく、そのまま放置されていた。

フィラデルフィアを訪れ、毎朝ライマンと散歩していた妹メリーは、半マイルしか歩けなくなり、やがて彼を訪れることさえできない程衰弱していく。また賀田貞一の死は、非常なショックであった。1882年ライマン「日本油田之地質及ヒ地形図」の完成を助けるためにノースハンプトンにやってきた後、第二次ペンシルベニア地質調査に加わり、立派な仕事を成し遂げた誠実実直な賀田、Tokuにやさしかった賀田、彼の炭鉱経営の苦勞を真剣に聞いてくれた賀田、最も身近に感じていた賀田を失い、ライマンは彼の死を深く悲しんだ。続いて前田精明が死亡し、1902年に亡くなった稲垣徹之進を加えると3人で、残る助手の数は8人となった。

翌年1916年6月、安達仁造からKōの死去の知らせがあった。Kōとは、ライマンが可愛がった利発で、やり手のコック秋葉幸太郎である(第4図)。彼が書いた「米曼氏賄帖」を見ると、毛筆の鮮やかさ、頭脳明晰を感じると共に、彼がライマン邸家事一般の事務を手がけていたことが想像できる。助手安達仁造の「懐旧談」によると、ライマンの離日の際、店を開く資金を

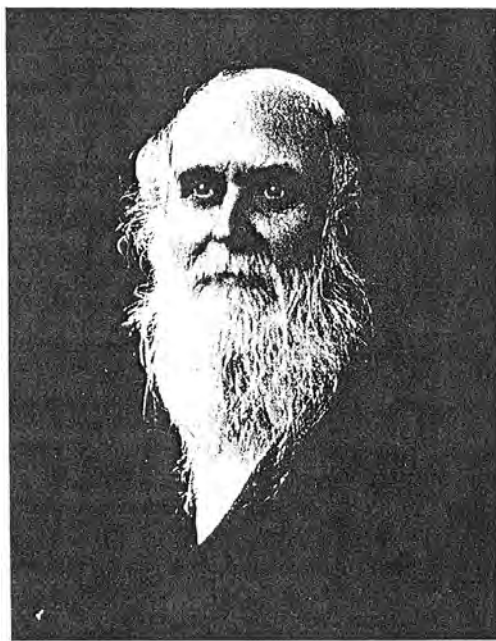


第4図 秋葉幸太郎と家族(マサチューセッツ大学図書館蔵)。

もらい、京橋豊町に「幸すし」を開いた。彼が毎晩ライマンの写真の前に果物を供え、感謝を捧げた逸話は、真にKōらしい。晩年には、家を2軒建て、家来(使用人)8人を擁する程繁盛した。

ライマンが傘寿を迎える1年前から、不幸不運が始まった。彼の石炭鉱山の経営は手に負えず、従弟フランク・ライマンに任せた。彼はまた、リューマチを患い、日課であった歩行を中止せざるをえず、老いの身の衰えを自覚するようになった。エドマンズは、ライマンの病状を、1914年12月14日の日記に次のように書いている：ライマンはすっかり弱り、室内が寒いので日中はベッドに入っているが、ともすれば眠ってもいる。大変弱っているので、食事の世話を申し出たが断られた”。ろうそくの火が、風に吹き消されるような心細さを感じる一方、彼の断固とした意志がうかがわれる。

しかし、やがて衰ええた火が再び燃え上がる如く活躍を始める。彼の地質調査と同じく、長年の経験による汗の結晶「菜食論」の編集および出版の計画



BENJAMIN SMITH LYMAN
AT 81, AFTER NEARLY 53 YEARS OF VEGETARIAN DIET

第5図 ライマン 81才(菜食論の本より)。

が、以前から少しずつ進められていたが、彼は「時来る」と元気づき、盛壮として完成へと全力を注ぎ込んだのである(第5図)。

ドクタービューケマへ書いた1914年4月11日の手紙によると、ライマンは、「菜食論」の出版を計画し、用意周到かつ詳細、すでに本の装丁まで決めていた。カバーの表裏の絵は「狐と鶴」で、日本人が描く鶴は上手いと、日本画家を決めていたらしい。この狐と鶴はイソップ愚話「狐と鶴のごちそう」に登場する2匹の動物で、狐に招かれた鶴は、出された浅いお皿のスープが飲めず、今度は狐を招き、細長い壺に入れた肉を出して復讐した話は有名である。但し、イソップの教訓“他の人を傷つければ、自分も同じように傷つけられる”と異なり、ライマンの趣旨は、菜食の知識がなければ、菜食の真価を得ることができない、熟知せよと、狐と鶴の話にして、わかりやすく説明したのである。この頃から、「菜食論」に関する内容の手紙が増えてきた。

1914年春、ライマンは、助手たちの代表として、西山正吾から送られてきたぎゅう詰め(柳行李)を受け取った。ずしりと重たい行李から、彼の馴染みの日本

食品が次から次へと現れた。食品の名は書かれていないが、椎茸、昆布、かんぴょう等、ライマンが調理法を知っている品々であったろう。一つだけ凍りこんにゃくをどうやって料理するかわからず、ペンシルベニア大学の日本留学生が訪れて来たら、教えてもらおうと、西山への礼状で述べている。

また、ライマンのカレー料理は評判であった。1870年パンジャブ地方油田調査のため、ライマンがインドに1年ほど滞在した時に、カレー料理を覚えた。カレーさえあれば、時に応じて季節の野菜を選び、簡単でもあるので、彼は、しばしばカレー料理で客をもてなした。

桑田権平は、積極的にライマンの日本菜食料理に協力した。ノースハンプトンハイスクールを卒業し、マサチューセッツ州技術専門学校の学位を持ち、英語は自由自在、年配の助手達と違っててきぱきと行動し、ライマンの日本料理に関する質問や願いに応じた。

ライマンの日本料理の知識はどれ程であったのだろうか。Ubaと、ライマンが江戸で習ったyubaとが同じであることを、権平が彼に指摘すると、突然ライマンは、1876年Mr. Matsukataに東京の名高い料亭に招待された折に味わった最上の湯葉料理を思い出した。松方正義は当時大蔵大輔で、15日前に勸業寮頭を兼任し、ライマンの上役になったばかりであった。その時に供応された舌触りの良さが忘れられず、帰宅するや、絶品の湯葉料理の話をコックKōにすると、「では私がその湯葉料理を作りましょう」と彼は早速引き受けた。しかし、Kōの湯葉料理はうまいかなかったらしい。ライマンは油が失敗の原因とみている。最も適する油は胡麻油であったろうと、妹メリーに語った思い出話から推量すると、ライマンは日本料理に詳しく、相当な和食通であったと思えてならない。日本での調査旅行では、「精進」と言って日本食を注文し、食事に全く事を欠かなかった。フィラデルフィアでは、ニューヨーク224イースト59ストリートにある片桐兄弟会社へ、最高級の醤油4ガロン、日本椎茸を2ポンドを注文した記録が残っている。残念ながら、1917年に発行された「菜食論」には日本食レシピは含まれていない。

ようやく「菜食論」出版が具体化したのは、2年以上過ぎた1916年の初夏であった。フランク ライマンへの手紙で、助手たちが全く予想しなかった500ドルを送

ってくれたので、これを印刷費用にしたいと語っている。毎年12月11日の彼の誕生日に、彼らから500ドルが送られてくるが、すべてフランクへの借金返済にしていた。この予想外の送金を是非出版費用にしたいと、ライマンは考えた。しかし、10月になると、ライマンの元金では十分でないことがわかり、結局、フランクの一部を支出してもらうことになった。1917年3月の、「Vegetarian Diet and Dishes」がライマンの住む708ローカストストリートに近い、南七番街にあるフェリス&リーチ出版社から遂に発行された。日本訳「菜食論」という表題はいささか堅苦しい。エドマンズは「料理の本」と呼んだ。この本の内容は、菜食論と菜食料理の作り方の2部からなっている。全416ページ中1,001のレシピが大半を占める。1864年ライマンが菜食主義者になって以来、集めに集めたレシピで、ミルク、卵、野菜、果物、豆類、パン等、菜食者のための実用的で簡単、かつ楽しめる料理の本である。21世紀のぜいたくな舌の持ち主にさえ、魅力的なレシピが見付かるかもしれない。

「菜食論」は好評であった。書評が書かれ、購入書店はフィラデルフィアは勿論、ボストンからシカゴへと広がった。フランク ライマンは10冊、安達仁造は助手達を代表して、100冊注文した。菜食主義者や菜食レストランでも評判であった。エドマンズ日記から一例を引用しよう。本が出版後、約10ヶ月過ぎた1918年1月23日の出来事である。エドマンズ独特の軽妙な筆致で書かれている。

私がライマンの家に居た時、菜食食堂の赤ら顔の女の子がライマンを訪れ、彼の料理本を2冊買い求めた。彼女は熱情に溢れ、ブロークンイングリッシュで、心を込めて本について語った。ユダヤ人でなくてロシア人だ。理想主義の国民は何時か世界を救うかもしれない。

ライマンの「菜食論」は、アメリカ初めての菜食主義に関する本に違いないと思っていたが、確認するための記録がなく、いろいろな角度から調べてみた。しかしライマンの名は見当たらず、時間を浪費したのみであった。断念せざるを得ないと思った矢先、ダウンロードしている空白から、突然ニラの絵が眼前に現れた。少なからず驚き、さらにクリックすると「Leek soup」と現れ、次にBenjamin Smith Lymanの名が出現し

た。これがライマン「菜食論」の中にあるレシピの一つ、ニラスープであった。出所は、フィラデルフィアライブラリー コンパニーによって、1986年に出版された本「Thirty-Five Receipts from “the Larder Invaded”^(註1)」で、内容は1699年の“人参プディング”から、1921年の“タンポポとネギサラダ”の35品が掲載され、ライマンの“ニラスープがその32番目にある。オリジナルレシピは、19世紀で有名であった料理家マリアポーラのスープの一品で、誰にでもできそうな料理法なので、大ざっぱに紹介してみよう。

ニラのスープ

ニラを洗い根元を切る。白い部分を薄切りにする2カップ。ジャガイモの皮をむき、さいの目にきざむ4カップ、そして水にさらす。バター大さじ2、または油大さじ4、ニラときざんだ玉ネギ大さじ4をスープ鍋に入れ、火にかける。ゆっくり20分、しばしば混ぜながら煮込む。そして4クオートの湯、ジャガイモ、塩茶さじ3、胡椒茶さじ半を加え、少なくとも30分以上煮込む。熱いところを供する。美味しく、身体に良く、温め直したスープは、作り立てよりもさらに美味しい。

「ニラスープ」の左ページに古びた教会の写真がある。このバイブルクリスチャン教会(1845-1920)がベジタリアン運動センターでもあったことがわかった。前述した「35レシピ」の本によれば、ライマンはバイブルクリスチャン教会の哲学、殊に菜食主義の影響により[Vegetarian Diet and Dishes]を編纂したと書いている。推論か事実かはともかくとして、無神論者ライマンとバイブルクリスチャン教会の関係を調べた限りでは、個人的レベルの以外には、教会の人々とは付き合っていないようであった。

フィラデルフィアバイブルクリスチャン教会の源流は、1809年、英国マンチェスター市のサルフォードに設立されたバイブルクリスチャン教会に遡る。宗教を通して菜食主義を奨励し、リベラルで民主的な教会であったと言われる。1817年、この教会のメンバー41人がアメリカへ移住し、フィラデルフィアでキリスト教の伝道を開始した。やがて教会を建て、1850年に教会内にアメリカベジタリアン協会を創立した。1ヶ月肉食を断った人ならば会員になれる大らかな資格が与えられた。19世紀末、ヘンリー S. クラブが最高牧師に

なってから、協会は大いに活動を始め、菜食運動に力を注いだ。クラブの没後、バイブルクリスチャン教会が閉鎖となり、それと共に信者のアメリカベジタリアン協会も自然に消滅したようである。

5. エドマンズ日記

“コンスタンス退場 ライマン登場”，10月21日の彼の日記のトップに書かれた大文字が、まず視野に入った。それはエドマンズが、ライマンの住まいの隣に越して来た日である。彼の新住居はワシントンスクエアにあり、彼の奥の部屋から階上に出ると、ライマンの住み家706ローカストストリートにつながる。ライマンの隣人になったと言ってよからう。これで何故両者の文通がまればったかという謎が解けた。

この日以来エドマンズは、ライマンの話を楽しみ、食事を共にし、彼の病状を心配し、時には嫉妬や怒りを日記に表しているが、ライマンを尊敬し、彼の死後、生涯を通し忘れられない人として、彼を偲んだ。

これまで「ライマン雑記」の資料は、書簡と記事が主であった。書簡は達意簡明を旨とするので理解しやすい。日記は厳然たる個の世界を表出している。エドマンズの世界に馴れるのには、容易ではなかった。例えば移転を決定するまでに、5ヶ月の時間をかけている理由は、コンスタンスと別れるのが辛く、なかなか決められなかったのである。彼の日記を読み続けていく中に、コンスタンスは10代に満たない少女であったことが明らかになり、彼がベドフィリア的な傾向があることもわかった。日記は書簡よりも理解するのに手間取るが、スナップショット的な短文には、彼がライマンと談笑している声まで聞こえるような感覚を覚える。

エドマンズが移転して半年過ぎた1912年6月に、彼の菜食主義の友達ロード夫妻をライマンに紹介している。彼は夫妻に深甚な印象を与え、彼らはライマンの高潔な人柄に圧倒された。エドマンズは日記に書いている。そのページの空白には、“ライマンに彼の臨終看護婦を紹介す”という書き込みがあった。日付けは1920年8月30日で、ミセス ロードは1919年10月ライマンをチェルトナムのロード家の自宅に引き取り、彼を最後まで看取った。エドマンズはライマンとの9年余りの友好を偲びながら日記を読み返し、筆を加えたのではないと思われる。

10月27日、ロード夫妻は再びライマンとエドマンズを招待した。今回は彼らが畏敬するバイブルクリスチャン教会の最高牧師ヘンリー S. クラブが加わった。クラブはまたアメリカベジタリアン協会の会長で、殊に菜食主義運動に力を注いでいた。彼は1827年英国で生まれ、父が菜食主義者であったゆえか、早くから菜食論を唱え、英国のバイブルクリスチャン教会で活躍した。1853年アメリカに移住し、米国ベジタリアン協会にいち早く参加した。クラブは単なる宗教主義者ではない。奴隷制度廃止を叫び、北軍の一人として、南北戦争に参加している。彼はまた人道主義者で、理想高き人であった。宗教については異なっているが、話題豊富で、共に半世紀の菜食主義の歴史があり、2人は和気あいあい、見解が一致し、大いに楽しい一時を過ごした。

1914年5月6日、ロード家で、ライマン菜食主義50年記念の祝いが行われた。1864年彼がカリフォルニア州クイックシルバー鉱山調査の折、不便な土地ゆえ、パンとチーズだけで数日過ごしたことから、菜食が健康に良いことを知り実行して以来50年の月日が流れた。数日前の教会の祝いよりも、個人的な温かいもてなしのために、当日ライマンは、彼の得意な8種類の野菜カレー、チャトニー、醤油を持参した。

6月21日、クラブ牧師がライマンとエドマンズを、彼の87才の誕生祝いに招いた。ライマンが妹メリーに書いた手紙によると、病弱なミセス クラブは出席せず、晚餐、2マイル程の歩行、ベランダでの雑談と、3人だけで静かな宵の一時を満喫したようだ。クラブが南北戦争中、雑誌「ニューヨーカー」や新聞「トリビューン」を創刊した有名なホレスグリーグの下、従軍記者として活動した話、負傷し年金を受けている話、ライマンの故郷ノースハンプトンを訪れ、グラハムクラッカーで有名なシルベスター グラハムの未亡人を訪れた話、クラブが世に知られた栄養価が高いグラハム粉でパンを作った話等々、豊富な話題について、3人は時を忘れて話し合った。またメリーに、クラブは耳が遠いが、つやつやとした顔色でかくしゃくとしていたと印象を語っている。クラブはライマンが死去した約1年後、1921年10月29日に94才で没した。

ロード夫妻は週に1回ライマンを正餐に招き、夫妻の結婚記念日、ミスター ロード、エドマンズ、ライマンの各誕生日を祝った。これらは毎年の行事となり、1915年のエドマンズの日記に次のように記されている。

9月4日ロード 42才、11月21日エドマンズ 58才、12月11日ライマン 80才。エドマンズはライマンだけが度々ロード家に招かれることをあまり快く思わなかったらしい。

ライマンの幼馴染みであったハンナ ブルアーが1916年3月、ブライト病で突然亡くなった。エドマンズの日記「6月25日雨」のページに“ライマンマサチューセッツより帰宅、胸をなで下ろす”の一行がある。ライマンが、老いの身を励まして、ノースハンプトンへ赴き、ハンナの妹フランシスを慰め、予定よりも長く滞在したことを、エドマンズは深く懸念したのである。ライマンはこれが彼の最後の故郷訪問であることを知っていたに違いない。

その年の10月、ライマンは安達仁造の手紙と写真を受け取った。1873年18才で、奉公人として芝門浄運院にやってきた安達は今では61才、大家族の家長で、また古河炭鉱九州地方総支配人である。ライマンは時の流れを痛感した。何度もメリーに語った約43年前の忘れられない日本の生活、殊に東京麹町平河町5丁目17番地の思い出が再び甦った。豪壮な和風の家、かつては明治天皇の母堂が住まった荘厳な邸宅を修繕し、一部洋式に改築された家は、20以上の部屋、長い廊下、中庭、裏庭等々があり、長屋が付いていて、門番、使用人、そしてTokuの父馬丁一家が住み、近くに馬小屋があった。ライマンを家長として、多数の日本人が住み、皆で和やかで心地よい日々を過ごした。この遠い昔の平河町の生活は、夢のようでもあり、はたまた色褪せた写真のようでもあったかもしれない。しかし彼の人生で最も大切にしたい思い出の一つであったと思う。

その年の12月26日に書いたフランシス プレアーへのクリスマスプレゼントの礼状でも、彼の日本への愛着と追想が感じ取られる。彼女のライマンへの贈り物は、日本の生け花の本であった。滞日中、生け花品評会に参加した経験談を、次のようにフランシスに語っている。秋山美丸夫人^(註2)と組になり、ライマンが大きなやせこけた紫色の木蓮を選ぶと、秋山夫人が“そんなのを選んで駄目”とささやいたが、ライマンはそれを無視して、どんどん切り続け、最後には短い茎に1、2の葉を残して、一輪の木蓮を小さな花器に挿した。師匠は日本流の慇懃丁寧な態度で、ライマンの作品を上出来とほめた。“私は華道の心得が全くありませんでしたが、慇懃丁寧な態度と幸運によって成功し



第6図 112 エルムストリート ロードの家 (Valerie-Ann Lutz 撮影)。

ました。”ライマンが心底から日本と日本人を愛していたと、しみじみ感じる手紙である。

1917年1月末近く、ライマンはハーバード大学の寮友であったフランクリン B. サンボーン(註3)の股関節骨折の報せを受け取った。大学時代1853年から1867年までの彼のライマンへの書簡(註3)がすでに出版されていることから推察できるように、サンボーンはライマンの無二の親友であった。少なくとも64年以上続いた友情—ライマンは老身のため、厳寒のコンコードに旅ができないことを、どんなに無念に思ったであろう。

学生時代に二人の若者は、奴隷制度廃止、博愛主義を唱え、エマソンの高い理想自立の思想に魅せられた。サンボーンは、情熱家で、実行主義者、有名な南北戦争の発火点の一つになった、ジョン ブラウン事件に直接参加しているし、教育者、著述家、ジャーナリストとして最後まで活躍した人物でもある。両者の手紙は、信頼、尊敬、友情に溢れている。ライマンは、1ヶ月後に、サンボーン(註3)の訃報に接した。

同年3月8日に亡くなった山際永吾の知らせによって、ライマンは、若者達と呼んだ助手たちが次第に去っていく悲しみを深く感じた。しかし、彼の息子山際太郎に、将来助手たちの有望な子供が、親達の世界を受け継いでいくと思うと嬉しいと、喜びを弔慰の手紙に書き加えた。

12月3日、ライマンとエドマンズは、112 エルムアベニュー チェルトナムに新築されたロード家の晩餐に招かれた(第6図)。夢の家の実現!ライマンがこの家で没するとは、誰が想像したであろう。

エドマンズの1918年の日記には、ライマンの名が出てくるページが、ぐっと少なくなり、ヨーロッパに向か

う陸海軍を見送る描写が増えてきた。アメリカが第一次世界大戦に参加したのは前年の4月、影響はエドマンズの生活にも及んだ。平和主義者のライマンとは、自然と縁遠くなってしまった時期といえようか。

ライマンは、1年前から30年間住み着いた赤煉瓦の3階建の708番地ローカストストリートの家賃を30ドルから50ドルに値上げすると宣告されていた。彼の家を出ると間もなく、アメリカ建国時代の歴史を語る建物がずらりと並ぶ地域に入る。インディペンデンスホールや自由の鐘は顕著な史跡の代表の一つである。エレガントで静寂、全体が公園の雰囲気漂わしたが、1917年頃に近辺が一等住宅地として移り変わり、土地の値段が上昇しつつあった。

1888年に移り住んで以来、彼の全盛期の思い出に満ちた家を離れるつもりはなく、従弟フランクの値上げ分を払う申し出も断り、長い間そこに居座っていたが、遂に翌年の3月に209南四番街へ引っ越した。新居は近くであったが、5千冊以上の書籍を移すのさえ大仕事である上に、地図、野帖、浮世絵、写真等々を運搬するのは、83才のライマンが指揮を執ったとしても、並々ならない大仕事であったろう。

桑田権平へ移転した家の様子を描写している。全体的に見てライマンは、転宅に満足したようだ。窓から眺めると広場はないが、広い繁華街で、向かい側に清潔で大きいベルテレホンビルが建っていると、外観を述べ、内部は彼の趣味にぴったりと満足気である。客間兼書斎は21平方フィート、快適で素晴らしく、集まりにもってこいだと、そこで昔の日本人クラブの集まりを思い出している。寝室、客用の小さな部屋、浴室とキッチンがあり、どの部屋にも書籍が積まれ、地図や岩石標本、和漢の拓本等部屋一杯に並んでいる様子が眼前に浮かび上がった。

ライマンにとっては、1918年は引っ越しと「菜食論」に関する仕事で過ごした多忙な年であったに違いない。12月11日、エドマンズが彼の友達、少女のマジョリー、アンおよびマーガレットを伴ってベゴニアの鉢を土産にライマンを訪れ、83才の彼の誕生日を祝った。

その年の暮れからライマンは目に見えて弱り始めた。ここでエドマンズの内なる声について述べたい。「Heard」と書いた言葉が、日記に度々出てくる。幻聴ではなく、内なる声を耳にするので、彼の勘ではなかろうか。翌年2月4日の黄昏、彼は“ライマンは死には



第7図 エドワード ライマンとフランク ライマン一家 (Historic Northampton蔵).

しないだろう”の声を聞いている。ライマンが危篤に近い病状であった日である。翌5日、ライマンの家で、彼の従弟フランク ライマンに会った(第7図)。“ライマンに、何かあったら、いつでも知らせてくれ”と、エドマンズに渡した彼のアドレスが日記に大きく“14, Wall Street, New York”と書かれている。その日、フランクの訪問ですっかり元気付いたライマンは、エドマンズにいろいろと話をした。富士山の爆発は見えていないとか、蝦夷調査3ヶ月目に爆発した噴火山の話、日本人の温泉好きの話、温泉で一度若い女を見た話等の日本の思い出話は、鮮やかで生き生きとしていた。

“毎日、スープとカレーライスの簡素な夕食を一緒にしませんか。孤独の苦しみから助けて下さい”。エドマンズは、ライマンから5月21日付のタイプした手紙を受け取り、週1ドルの食費を払い、夕食に加わったが、口に合わない食事のため、食事時の話し相手となった。

6月12日最も親しかった妹メリーの死去の報に接した。彼は荷が背から下ろされたようにむしろ安堵し、悲しみよりむしろ欣然とし、もう思い残すものはないと、心が楽になったのであろう。

9月1日労働の日に、エドマンズはライマンの家で、T. 稲垣に会った。彼はライマンの助手であった稲垣徹之進の息子で、長崎造船所の技術者であった。ライマンとエドマンズをエンジニアクラブに招待し、帰りにはタクシーを呼ぶ丁重さに加え、ライマンへの一意専心の稲垣の態度に、エドマンズは非常に感銘を受けた。

9月30日からライマンの人生が急転する。悪戦苦闘の日々が10月末頃まで続いた。ライマンを追出そうとする人々、第三者の介入、彼の苦境から助けようとする人々、しかし最後に、ロード家の人達とエドマンズのグループに凱歌が上がった。

まずライマンは9月の末、家賃が50%上がる通知を受けた。問題は、値上げに従うか、階上に移るかである。これは疑いもなく、フィラデルフィア市長に選出されたハンブトン モアーのために、ライマンのスイートを明け渡そうとする明らかな企みであった。翌日、家主がエドマンズにライマンの病気が悪化したことを知らせてきた。エドマンズが、ライマンへの態度を非難すると、値上げの話はしていないと否定したが、このスイートは、市長就任後の住まいとして、もってこいの場所にあるので、モアーが、50パーセント、100パーセント、いや、それ以上払うのを知っての行動であるのは明白であった。この日、フランク ライマンの指図で、ユニタリアン牧師が看護婦を派遣し、温めたスープを彼女と共にライマンを抱き起こして飲ませた後、ようやく1人だけで食事をする慌ただしい1日であったと日記に書き留めている。エドマンズは、彼の書いた“Poor Beast”の本が、ジョーンズホプキンス大学の東洋宗教学のテキストに使用されている程の学者である。彼は人種的偏見が強く、感情が激すると、ライマンにさえ、あわれな、老いぼれの無神論者めと日記に書いているが、しかし真は弱者に親切で、誠意を尽くす善人で、ライマンの看護に全力を注いだ。ライマンが死ぬのではないかと心配していたが、翌2日、彼が2度目に訪れた時は、ベッドで野菜を食べる程回復していた。

ロード家で養生することをライマンがようやく承知したので、ライマン支持者達は歓声を上げた。多くの案が交わされた末、エドマンズの提案の10月30日にライマンのチェルトナムへの転居が決まった。彼の莫大な蔵書についての意見が交わされ、ロード家に離れを建て増してはとの案が出た。彼らはライマンの移転を歓迎し、安堵の胸をなで下ろした。

もう悪らつな家主は、彼を困らせたり、いじめたりすることはできないと、事態の好転に喜んだのも束の間、フランクの頼みによって、ユニタリアン牧師が選んだ医師が来ることになった。牧師と同類の医師が来るのではないかと、また従弟フランク ライマンの権力を用いるのではないだろうか、ライマン擁護派は不安

を抱いた。

医師モリス パーセルは若輩で、予想したように味方ではない。ライマンが牛乳と生のトマトをそのまま食べようとすると、トマトを取り上げた。そこにエドマンズが介入し、ライマンは牛乳だけを飲んだ。この人物は医者で請負人、そして共謀者、ライマンを殺すのではないかと警戒心が芽生え、例の“*Heard*”が、全部ではないが、会計をパーセルが握っている。疑わしいとささやいた。

ライマンは、翌10月9日、ペンシルベニア病院へ送られることになった。彼は病院行きを拒否し、車で40分の道程でもかまわない、今からでもすぐロード家へ行くと主張したが、“時すでに遅く”、どうすることもできなかった。そして1週間の入院。“ライマン昨日退院バンザイ!”と10月17日の日記に、ライマンが自由の身になった喜びを記している。

6. チェルトナム

この最後の章を書くため、筆者はヴァレリー アンルーツに大変お世話になった。1911年から1920年の日記に目を通しライマンの名が出てくる箇所をコピーする仕事や、ライマンが死去したロードの家の数々の写真を撮って下さり、その上最後に、チェルトナムの歴史を書いて頂く幸運に恵まれた。

.....

ベンジャミン スミス ライマンが最後の約10ヶ月余りを過ごしたペンシルベニア州にあるこの町は、1682年英国チェルトナムからやってきた15名のクエーカーが、有名なウイリアム ペンの土地の一部54,070エーカーを購入して作られた村であった。南北戦争(1861-65)の黎明期、チェルトナムの住民は、奴隷脱出者を助けるための秘密組織のルートの拠点を作り、奴隷廃止運動に重要な役割を果たした。

19世紀後期から20世紀の初期になると、チェルトナムはフィラデルフィアの郊外と変じた。資産家、有力者達が地所を購入、鉄道王とか、南北戦争で財を成した資本家、デパートで儲けた富豪家などの連中が続々と家を立てた。彼らが雇用した中産階級の人々や使用人達も、こぢんまりとしたツインハウスや前庭や裏庭が付いた一戸建てを求め、やがてチェルトナムの並木通が広がっていった。ロード家が所有して



第8図 フランク ライマン(来曼先生小伝 桑田権平)。

いたツインハウスは、エルムアベニューの100街区に建てられ、1910年代後期から1920年初期頃まで人気があった一部修正されたオランダコロニアル風の家である。また、このエルムアベニュー区域は、かつてはビーチャー家の土地で「*アングル トムの小屋*」で世界中に知られたハリエット ビーチャー ストーがここで構想を練ったとの説がある。さらに、ストーの父方の祖母 エスター ライマンがコネチカットのライマン家から出ているという話もあって、興味深い。

ライマンがチェルトナムのロード家へ移ったのは、退院して2日後の10月19日と推察してよいであろう。彼の容体は、はかばかしくなく、冬を越すことができるかどうか疑われた。日記によると、エドマンズは2週間もライマンに会っていない。長い間の交際で、一番長い空白期間で、ライマンが誰か側にいると幻覚に襲われていると聞くと、それは疑いなく自らの霊魂だと信じた。

11月2日見事な秋の日、エドマンズはチェルトナムへ行き、久しぶりにライマンと夕食を共にした。これが最後の彼との夕食であろうかと思う程ライマンは衰

弱していた。1918年の209南四番街への移転は、83才のライマンにとって、大仕事であった。そして家主の追い出しの策略に、精神的にまいって病気となり、彼の忌み嫌うフィラデルフィア病院への入院、退院後すぐチェルトナムのロード家への転居で、心身共に疲労困憊したのは当然である。エドマンズは、各日曜日毎、感謝祭、誕生日に彼を訪れた。その年のライマン84才の誕生日が最後となった。

年が明けて、1920年の日記の舞台上に登場する人々は、エドマンズ、ロード夫妻、フランク ライマンと変わり、遺言、エドマンズのチェルトナムへの移転、ライマンの死と展開していく。

ライマンの遺言の問題が差し迫ってきた。フランクライマンはミセス ロードに、度々聞いておくようにと頼んでいたらしい(第8図)。エドマンズは1月19日の夜、ライマンが“will, will”とつぶやいたのを、遺言でなく、彼の意志力will powerの意味と解したらしい。例の日記の“heard”は、“遺言ではなかったのだろうか”と疑問を持ったようである。彼がすでに思考力を失ったライマンに遺言について、到底尋ねることができなかった気持ちがよく理解できる。

2月16日頃であったらうか、驚くことに日記によって、エドマンズがチェルトナムに引っ越していることがわかった。しかもロード家の屋根裏の仮住まいの身である。彼もフィラデルフィアの建国史跡近くのビルに住んでいたの、地価の急騰で追い出されるのは、すでに時間の問題であったのだ。63才、厳冬の2月ただ一人、多くの荷物を運ぶ都落ちは骨身にしみて辛かったに違いない。文化都市フィラデルフィアと全く異なる環境、ミセス ロードとの違和、その上もはやライマンとのコミュニケーションは不可能となり、彼は絶望と孤独とに戦わなければならなかった。

エドマンズ日記のコピーは、ライマンに関するページが主で、彼に関する資料は乏しい。収入はどれ程であったのだろうか。時折原稿料などが入るようであったとしても、司書および学者の生活は、豊かではなかったと思う。しかし、日記から察するところ、時々ペンシルベニア歴史協会図書館で働いていたようである。語学、歴史、哲学、宗教等々にずば抜けた知識の持ち主は貴重な存在であった。彼を囑託として再び司書として採用したと推量してよいであろう。

5月26日近くのエルムアベニューの家で、文学サークルのような会があり、エドマンズはこれに出席した。

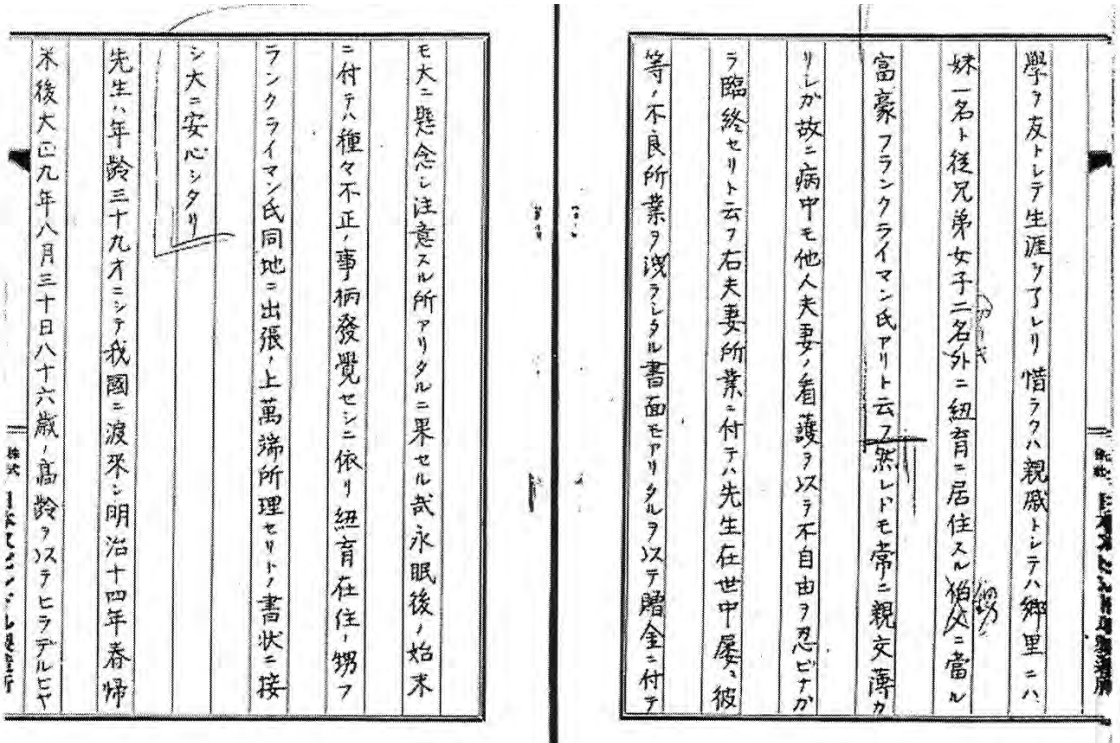
それはチェルトナムのエリート達との会合であった。彼はロード家の近所の連中が、古服を身につけた屋根裏部屋の男が、この様な人々と付き合っているのを見たら、大口を開けて驚くことであろうと、その日の日記で感想を述べている。彼の内なる心“heard”は、“去るな! 昨日の会った人達が助けてくれる”と叫んでいる。彼の苦悩が発した言葉ではあるまいか。

8月30日午前2時30分、最後まで薬を拒否して、死の苦しみと闘ったライマンは、遂に息を引き取った。

9月2日、ミセス ロードは、約3週間前にライマンから聞いた最後の願いを発表した。従弟フランク ライマンには愛を、ウイルフレッド スコフと彼の助手には、コマーシャル博物館のすべてを与えるよう、そしてスコフの義妹が日本の生地で作ったクッションを、彼女に返すようにと3つの願いであった。この3人をライマンに紹介したのは、エドマンズである。またミセス ロードがライマンの蔵書について問うと、それは誰のものになろうとかまわないと答えている。筆者は、この本の件と、長年の親友エドマンズに関して何も触れていない事実、啞然とせざるをえなかった。4日フランクがチェルトナムを再訪し、ライマンやライマン家の思い出について語った。ライマンの父が、大富豪のスミス家の娘と駆け落ちし、スミス家はこの事件を絶対に許さず、ライマン家と縁を切った話を聞き、エドマンズは、ライマンの最後の苦しみは、その忌まわしい呪いではないか、ともあれ、ライマンは熱烈な愛の子だと感想を残している。因みに、ノースハンプトンにある名門校スミス女子大学は、叔母ソフィア スミスによって、1871年に創設されたものである。またエドマンズは、フランクからライマンの未完作品の「キリスト教と儒教」及び「ヒンズー結婚の研究」を譲り受ける許可を得た。

ライマンとフランクは、異母系の従弟関係である。彼はハーバード大学を卒業、父の死後、ビジネスと富を継いだ。彼の叔母は、貿易業で財産を築いたウォーレン デラノと結婚し、その娘が32代大統領フランクリン デラノ ルーズベルトの母で、両家はニューヨークの最高の上流社会に属する。温厚で紳士としての教養を身につけた彼は、常にライマンを助け、最後まで伯父の世話をした。

ライマンの死後しばらくして、9月5日にミセス ロードは、T. 桑田を始めとしたライマンの助手たちの名が連なる8月8日付の手紙を受け取った。この短い手紙



第9図 桑田知明 来曼先生閱歴概要 自筆 p.22 (北海道大学付属図書館蔵).

は、ミセス ロードの6月3日と7日の手紙のお礼とライマンの高潔な人柄を称え、彼の自然療法および哲学についても触れている。これまでは、手紙の差出人の筆頭名は、英語を書いた賀田貞一であったが、ここで桑田知明に変わっていることに、特に注目したい。

ライマンの帰国後、11人の助手たちとの文通は、これまで主に賀田貞一が代表して書いた。賀田の死後、桑田が引き継いだ。彼は、16才頃から外国語に接し、開成所で語学を学び、洋行し、助手の中では最も西洋文化に長じていた。彼は桑田知明が賀田の役を引き継ぎ、以後彼とフランクとの文通によって、ロード夫妻の悪事が初めて明るみにでたのではないかと思う。

1991年、ライマンの助手の一人山際永吾の孫、山際永三氏からお手紙をいただいた。彼は、北海道大学図書館で桑田知明著「来曼先生閱歴概要」の原稿を読まれた折、3カ所が削除されていることを見付けられた。桑田権平著「来曼先生小伝」に付随された桑田知明が書いたライマンの伝記を調べると、“桑田智

明遺稿「来曼先生閱歴概要」抜粋”となっていて、3カ所消されている。最も重視したのは、次の部分である。

紐育ニ居住スル甥ニ当ル富豪フランクライマン氏アリト云フ然レドモ常ニ親交薄カリシガ故ニ病中モ他人夫婦ノ看護ヲ依テ不自由ヲ忍ビナガラ臨終セリト云フ右夫妻所業ニ付テハ先生在世中屢々彼等ノ不良所業ヲ洩ラシタル書面モアリタルヲ以テ贈金ニ付テモ大ニ懸念シ注意スル所アリタルニ果セル哉永眠後ノ始末ニ付テハ種々不正ノ事柄發覺セシニ依リ紐育在任ノ甥フランクライマン氏同地ニ出張ノ上萬端所理セリト書状ニ接シ大ニ安心シタリ^(註4) (第9図)

ライマンの親交が薄かったのは、フランクの父エドワードである(第7図参照)。ライマンの慎重を欠く炭鉱投資に疑問を持ち、資金の協力に消極的であったため、親交が薄しといわれたのであろう。筆者は、今までロード夫妻の献身的なライマンへの看護に感激していたので、全く信じる事ができなかった。しかし

エドマンズの記事から、次第にミセス ロードの偶像がくずれていき、ようやく桑田知明の記事の信ぴょう性を認めるに至った。

10月24日、エドマンズはロード家で、フランク ライマンと昼食し、ニューヨークへ帰るフランクとトロリーまで歩く帰途、彼からライマンが日本で貯えた財産を炭鉱の失敗ですべて失い、フランクが面倒をみていたことを聞いた。また、27日の日記に、例の“*Heard*”が“我々皆、臆病者だ。伝統、名誉、品位は死んでしまった”とささやき、30日には、“*Heard*”が“早く知る程良い。すべての悪は悪夢だ”とつぶやいた。この記述により、エドマンズはフランクから、ロード夫妻のすべての悪事も聞いたと推察してよいであろう。

エドマンズの記事の筆者所有のコピーは9月30日で終わる。曰く、「その日は、2人の日本人がペンシルベニア歴史図書館を訪れた。エドマンズはライマンの遺品を見せて説明した。午後には、フィラデルフィア貨幣古書学会史料編集員がライマンの記事を取りに来たので、1時間以上話した。今日は、早いもので、1年前フィラデルフィアのスイートで話した我が友ライマンが元気であった最後の日で、家主の家賃の値上げなどの事件も絡んで、健康を害し、だんだんに体が衰え、11月から3月までは、Mrs. ロードの看護下に死と戦った。ライマンの想い出は、折しもその日は雨で、ひとしお彼を悲しませた。

エドマンズには、もう一つ大きな仕事が残っていた。賢明なフランクは、最後のライマンコレクションの仕事は、エドマンズだけにしかできないと信じ、すべてを彼に任せた。

1921年5月8トン半の大型運送トラック2台が、フィラデルフィアから、ノースハンプトンのフォーブス図書

館に到着した。フランク ライマンの寄贈として、大量のライマンコレクションが送られてきた。エドマンズがコレクションを選別し、科学に関する資料は自然科学院へ送られた。自然科学院図書館の所有であるが、研究者はこれらを借り受けた米国哲学協会図書館で閲覧できる。社会歴史関係はペンシルベニア歴史協会図書館へ収まり、ライマン家関係はフォーブス図書館に送られた。しかし選別に一貫性がなく、フィラデルフィアの両図書館は書簡が主である。和漢英の古書、写真、野帖、家計簿、浮世絵、有名な「日本蝦夷地質要略之図」を含む地図等々がフォーブス図書館のライマンコレクションに収められた。質・量のいずれから見ても、これらは断然、他を抜き出していた。この大部分は、現在、マサチューセッツ大学、デュボイス図書館スペシャルコレクションに保存されている。

1979年10月1日に日本古書がフォーブス図書館の地下室にあることを聞き、ライマンコレクションと筆者が対面したのは、その月の30日である。その時の喜びは筆舌に尽くし難い。2009年の10月で30年となる。

註1 Weaver, William Woys (1986) : *Thirty-Five Receipts from “the Larder Invaded”*. p.81-82.

註2 北海道地質調査でライマンの事務に携わった秋山美丸夫人。

註3 Young Reporter of Concord, a checklist of F.B. Sanborn's letters to Benjamin Smith Lyman...prepared by Kenneth Walter Cameron, Hartford, Transcendental Books, 1987.

註4 桑田知明 来曼先生閱歴概要 自筆 p.22

FUKUMI Yasuko (2010) : A note on Lyman (23).

<受付：2009年9月26日>